

源氏烏帽子折

第一

曉風云々冬閑
からず春も長閑
なる状をうつす
四の男一四男八
疊にて邊鄙迄も
の義
立浪一春立つに
かく、浪は白河
の縁

哀じゝるし

曉風ゆるく吹て、冬日おごそかに輝やき、春雨なよめに洒いで、清盞花を粧ひす。今此時かや四ツの夷八ツの隅、春も閑に立浪の、後白河の法皇こそ、別て目出度き賢王なれ。天津御國を二條の院に譲り與へおはしまし、玉體安く仙洞に、遁れおりさせ給ひながら、萬機を後見政事聞へさせ給へば、道ある御代と百敷や、袂豊に初ぎしき、治る國の兆なる。既に平治二年正月七日、武臣安藝守平の清盛院參し、先新春の御慶を奏し、「別して當年は目出度き事のみ候べき、御喜悅の表じ御座候。其故は源氏の大將左馬頭義朝、藤原の信賴に與し、天下を傾けんと爲し所に、舊冬清盛待賢門の戰に打勝、義朝は野間の内海長田を頼み罷下り候所に、長田譜代の下人なれども勅命を重んじ、當月三日に終に義朝並に聲の鎌田を討取候段、神妙に存じ、長田の庄司忠致、同じく太郎忠澄、召連れ

思ひ者一語

賤が伏屋迄一貧
家迄迄
つま木一薪と夫
義朝にかく
しるよしして一
領地をもちて

參上仕る。義朝が首は穢を憚り、源氏重代の太刀物具白旗を切取て、是清盛が御年玉、
 國安全に治るも、一張の弓の勢ひたり。東南西北の敵を易く平けん「法皇大きに御感あり。
 清盛を中納言、長田は六位の主將に補せられ、重ての院宣には、「義朝が事は先祖滿仲よ
 り、累代忠勤の功篤しと雖も、此度思はずも朝敵信賴に與し、不覺の最期不便なり。内
 大臣の正二位を贈官し、朱雀の寺に標をたて追善有るべし」との御氣色にて、猶も長田を
 御階近く召れ、「汝朕が命を重んずと雖も、正しく主人と掣を討事天罰輕きにあらず、其
 罪を償はんには、義朝が思ひ者、常磐の前と云ふ女、幼き子供有りと聞く。尋出し守育
 て、切ての恩を報じなば、妻子を勞る志、草の蔭なる義朝も、髻を忘れて自然、汝が冥加と
 成べきぞ」と、漏る方なき院宣の、惠は賤が伏屋迄、實に明王の盛徳に譬へて言ば、此春の
 民こそ御代の心なれ。つま木には取殘されて有ながら、憂は變らで常磐木の、浮世の力
 落葉ふる、下の醍醐にしるよしとて、忘れ形見の涙の種。義朝公の弟は三人の子にな
 ぐさみ、今若は九ツ乙若は六歳、扱牛若は三歳にて、未乳離れぬ懷に、包む涙の世も狭
 く、宿も律に埋れり。悼しや今若、父の別れの涙の隙、竹馬取て打乗り、「歎き給ふな母上
 様、追付某平家追討の院宣を蒙り、まづ此如く馬に乗り大軍を引率し、父の敏清盛を

二葉幼少、今若は僧全成乙若は義國の事にて朝朝頼にあらめを應と作りかへたり

つめくー抓ること

頭の殿左馬頭義朝

討取は今の事。源氏の大將今若が武者振御覽候へと「庭の面を二三遍乗廻して立給へば、乙若小弓に小矢を矧、赤き絹を細枝に掛り、乙彼こそ平家餘さじ」とよつ引て兵と放ち、「嬉しや平家を射留し」と勇み給へば、牛若は母の膝より這下りて、彼赤絹をすんくに引さき喰さき、兄弟三人打喜び、「平家の赤旗討取たり。勝鬨揚よ。忍い／＼おう」と、手を拍いてぞ笑はると。此人々の二葉より斯成こそ道理なれ。成人の後六十餘州を踏かせ、源氏の光を輝かせし、右大將頼朝、蒲の冠者範頼、九郎判官義經とは此兄弟の生先なり。常磐夢とも辨へず、「なふ恐しや壁に耳。弓手も馬手も平家方。源氏の一家は皆じび、有るに甲斐なき世の中に、若も平家へ漏聞へ、如何なる憂さか重ぬべき。今日より左様の悪戯せば、コレ、つめく／＼するぞ」とたいじよだて、牛若を搔抱き、堂今若も乙若も今日は何とて手習せぬ。未だ手本はあけざるか。早々寺へ」との給へば、二人「あつ」と答へて悄悄と編笠被き手を取交し、立出給ふ後、姿常磐御前は見送りて、「可憐の有様や。頭の殿の在まして、世が世ならば供人よ、馬よ興よと云ふべきに、一僕をだに伴させぬ、彼が源氏の惣領の、成る果か」と計りにて、伏沈みてぞ歎かるよ。然る所へ長田親子大勢引具しどつと入り、「夫こそ常磐餘すな」と、牛若諸共引立る。常磐御前は聲を上げ、「長田とは己が事か。

一つは云々―助
くれば汝の供養
になると也

寺友達―寺小屋
友達

主を殺し婚を討つ非學非道の罪人よ。汝は鬼畜か木石か。妾は命惜からず。子供を助け得させよや。一ツは其身の祈禱と、前後不覺に泣き給ふ。長田打笑ひ、「尤も帝より妻子は宥免との仰なれども、清盛公より根葉を枯せとの御意を蒙る。サア今若乙若を出せ。然なくば命を取るぞ」といふ。當「テ、己が心に引當て卑しくも云たりな。自己も牛若も殺さば殺せ。今若や乙若が行衛は言じ」と、叫ばれるれど聞き入もせず搦め行く。神や佛も無き世かと、淺間しくこそ見へにけれ。是は扱置、爰に比企の藤九郎盛長とて、源氏重代の勇士なりしが、去ぬる保元の合戦に父を討たせ、幼少より流浪して此國に漂へしが、力強く脊高く今年既に十九歳。源氏亡ぬと聞くよりも、夜を日に繼いで都に上り、七條朱雀義朝の御墓所に參らる。向ふを見れば我年配なる若者の、直垂袴に太刀佩て編笠傾ぶげ、盛長をじろくと熟視る。盛長不思議と能く視れば、古への寺友達、義朝の膝元去ず、澁谷の金丸幼顔疑ひなし。「彼奴は義朝の御最期迄御供と聞きけるが、長田を討ずして逃來る卑怯者。詞をかくるも無益なり」と見ぬ顔して、御墓に花奉り水手向、生たる人にいふ如く、鷹口惜き御有様や。人らしき侍が切て一人御供せば、斯く闇々とは成給はじ。金王とかや云ふ粕丁稚、臆病者の腰拔の人でなしと知り給はず、頼みに召連れ給ふ

當官一あてこそ
り

ふりずんばい
婿あかぬもの

巢もりーかへち
ゆ卵
争論過て云々
乳切木は乳迄の
高さに切りたる
榊、喧嘩過ぎて
隠ぎても益なき

ゆへ、不覺の御最期是非もなし」と、堪忍ならぬ當言し。屍目に睨む眼より涙を流し申しける。金丸丸むつとせしが、左あらぬ體にて香花を捧げ、卒都婆に向つて、金口惜の御右様や。某が諫を御承引なく、長田に心を許し給ひ、果敢なく討れ給ひしよな。當座に腹切て冥途の御供と存ぜしかども、いやく死は易し、存生へて今一度、源氏の御代と醜し、御恥辱を雪んと斯の體には候へ共、若君達は御幼少、御家人どもは散々に成り、有る甲斐もなき藤九郎盛長と云ふ素丁稚、浪人して魂くだり、口先の廣言計りにて、臆病者の大腰拔、何の役にも立ち申さず。源氏の御運の拙さよ」と、同じく屍目に睨付々々詞を荒し申しけり。盛長又御墓に向ひ、「石塔に耳なく卒都婆物言ねばとて、拔ぬ太刀の高名、腕なしのふりずんばい、草の陰にて左こそ可笑く覺されん。死を易しと申せども、命を捨つる程ならば、長田奴に羽はあらず。討に討れぬ事や有る。然ながら武士と思へば恨みも有る。牛馬に劣りたる人外と思し召せ。本意は某遂け申さん。未來の妄執晴れ給へ。ア、南無阿彌陀佛」と云ひければ、金王又御墓に向ひ、「玉子の中にも巢もり有は尤かなく。親兄弟の兵に似たる方なきそんはづれ。夫程心剛ならば、さんぬる合戦に、今の口ほどなど高名はせざりしぞ。合戦と言ば逃足早く、争論過ての榊乳切木、後の風

腹の皮―腹の皮
よるゝの略、を
かしき事

合駈―片膝立
て、坐したる姿

博多王―不詳

言腹の皮。逃吠の犬侍臆病々々」とぞ笑ひける。盛長今は堪へ兼「犬侍とは誰が事ぞ」金王
聞きも敢ず、又「最前より其方が人外とは誰が事ぞ」盛「チ、澁谷の金王が事よ」金「チ、犬
侍とは御分盛長が事よ」盛長腹に据かね、「侍を捕へて犬侍とは如何に。今一言云て見よ」
と、太刀に手をかけ言ければ、金「ヤア侍とは人がまし。無益の太刀を抜んより、犬に似合た
尾を振れ」と云ふ。盛「ヤイサおのれ侍ならば、など主の敵長田は討ぬ。五穀つぶしの娑婆塞
け、末を大事に思はずば、おのれと爰で死ぬべきに、命が二ツ欲しいな」金「チ、我も源氏の御
末を貢ぐ者の有るならば、御分と爰で死ぬべきに、命がも一ツ欲しいな」盛「イヤ忤め美事我
と死ぬべきか」金「チ、死にかねふか。ヤア討かねふか」盛「誰を」金「己奴めを」盛「討たいな」
金「切りたいな」盛「無念さよ」金「口惜や」と、兩方りきむ居合腰、太刀の柄も摧けよと、握りひ
しぎ身を慄はし、互の心探りあひ、兩眼に血筋をはり、齒を鳴して睨み合、擬勢の程ぞ頼も
しき。盛長かつらくと笑ひ、「ア、言甲斐なき狼狽者と死して益なし。名將の御墓を腰抜
共に回向させ、勿體なし」と云ふ儘に、一丈有餘の高卒都婆、押取て出ければ、金王續いて飛
掛り、「君の標は渡さじ」と、確と取て引留る。日本中古兵揃に選れて、大力と名にふれし
藤九郎盛長、博多王の怒をなせば、源平の其中に剛力の聞有澁谷の金王昌俊、獅子王の力

獅子王—獅子の
專知—獅子王无
所—長(無量壽
經)

雜色—雜兵

を出し、ゑいやくと捻あへば、腕骨膝骨腰の骨、つがいくは唐紅、血ばしつて節あがり、額の筋は脛へ下り、脛の筋は頭へ上り、五百五十の力瘤、九重の藤葛、松をからんで苦むせる、巖に生し如くにて、二人踏だる足の下、土五六寸窪み入り、左手もぢり右手違ひ、呷と云ふて捻ければ、四方八寸の角卒都婆、中よりふつつと捻切て、小踊してばつと退き、雙方睨んで立たるは、人間業とは見へざりけり。暫時詞もなかりしが、一度に涙をはらくと流し、「チ、頼母しし金丸、心底現れたり。嬉ししく。疑ひし口惜さよ。許してくれよ」と言ければ、金、そちが心も見届たり。頼母ししく。最後の雑言も忠節の餘り。許せく」と、此上は心を合せ平家を亡し、頭の殿の鬱憤を休め申さんが、思へば拙き源氏の御運、口惜くは思はぬか、無念には思はずや」金、「口惜や」盛、「無念や」と、卒都婆投捨直と寄り、袖とくに縋り付、怒れる顔面引かへて、悲嘆の涙は堰あへぬ、眞の姿ぞ哀れなる。然る所に六波羅の方より雜色警固邊を拂ひ、「囚人」なりと罵り来る。人々木影に立隠れ、能く見ればこは如何に。常磐御前に牛若抱かせ、敷革に引据へ、武士四方を取廻し、長田の太郎は太刀取にて、瀬尾の七郎檢視と見へて、七、「コレく常磐、最早最後は極つたり。去ながら清盛公の御心に從ひ給はば、三人の若を助け御身の望も叶ふべし。

源氏烏帽子折

切詰—逢うては
離るゝことを露
の縁にて結ぶと
しハリ

鍾馗—鬼を喰ぐ
勇士にて玄宗帝
の夢に見えしと
しハリ

一生の思案所いかにく」と言ければ、常盤涙の隙よりも、「ヤア自らは女なれども義朝の妻なるぞ。狼狽事ばし言ずとも早く首打て。彼長田めに喰付て本望を達せん」と、艶に氣高き外背にてはつたと睨み、はらくと涙は玉を貫けり。彌「今は是非なし首打て」長田「承る」も慄ひ聲、膝わななくと後に廻り、太刀振上んとせし所を、盛長金王飛で出、長田が胸板蹴倒し、「主君の冥罰思ひ知れ」と、首搔落せば警固ども、「狼藉者」と立駭ぐ。槍長刀を押取押取、朱雀の野邊の草の原、露を亂して切結び、切解き追むすび、數十人に手を負せ、八方へ追散し、立ち返つて、金「さあくくく」、常盤御前は子供を具し大和路へ落給へ。日本國は平家方。此金王は姿を變へ、土佐坊昌俊と名乗、密に勢を集むべし」盛「出來たく」。某は關東へ馳下り、武藏相摸伊豆駿河、上野下野安房下總、源氏譜代の兵ども、それにも叶ずば、八丈大島蝦夷松前鬼が島へ押渡り、猛虎猛威の鬼を集て軍勢とし、平家を易く亡さん」金「チ、尤々」と、約束堅き石塔に暇申して立ち歸る。風神雷神厄神も、取りひしぐべき威勢は、鍾馗大臣獅子王の、暴たる姿も斯くやらん。

第 二

亢龍悔あり一昇
り詰れば降るべ
き悔あり

前の安藝守清盛の御前には、嫡子重盛宗盛を始め一門残らず伺候有り。未だ源氏の末類ども、方々に忍び居て、常磐親子を奪ひ行き、剩さへ長田の太郎を討取る事、如何なる大事か仕出さんと、評説眉をぞ擧がる。時に重盛申さるゝは、「たとへ源氏の末類神にもせよ、大將義朝を亡す上は、日陰者ども寄集り、たやすく平家を亡す事及びがたし。されば易に曰く、亢龍悔有り。滿れば欠く。此殘黨を討れん事、事を好むに似て候。只義朝が三人の子供を、密に搜し出されて、流罪せらるゝ迄に候」と、穩使に宣へども、清盛怒甚だしく、「常磐の前は女なり。子供は幼少、遠くは往じ」と、難波妹尾を大將にて、三百餘騎の追手を方々へこそ差向らる。扱又彌平兵衛宗清に仰付「不思議の者を搦捕」と、在々郷郷町小路、残りなく觸ければ、當時平家の威勢に、靡く草葉の蔭にだに、隠るゝ方は三重なかりけり。

常磐御前道行

頃は正月の末つかた、春めきながら冴かへり、袂の氷柱とき知らぬ、常磐御前は常磐木

ときしらぬ一解
くにかく

しのびつけたる
一隠れ忍ぶと忍
の緒とかく
諸國の秋・秋の
收穫

穂長—齒染
ありけう—愛嬌
か、柔は萬の唄

一つ身—背に隠
目なき小兒の若
物
蘇民將來—神代
の忠臣にて貧な
がらも武塔神を
恵みしといふ
(釋日本紀)

の、木の下面に踏迷ふ、夜深き空や世にあらば、今ぞ妹脊の寢入ばな。今朝はつれなく
むく起に、抱き賺して牛若の、夢をば母が懐に、泣寝入せし可愛さよ。今若はおとな
しく、吾妻からけに脚神締め、乙若の手を引、先に立たる歩みぶり、小太刀佩たる腰
付も、宛ら父の御影かと、涙に涙果しなく、しのびつけたる顔くせや、最ど傾ぶく笠の雪、
打拂ひつゝ見渡せば、賤が門田に薺摘む、東寺よつ塚烏羽繩手、諸國の秋を積のせて、
御世の貢の牛車、京の名残に轟かば、我が心も打乗せて、送れ見送れ呼返せ。返らぬ水
の泡沫に、初歌謠ふ初蛙、梅に年とる鶯の、翼は雪に覺まれて、まだ片言の初音鳴く、
をのがさまふ、春なれや、人の姿も若緑、竹田の里に來て見れば、藁屋が軒も飾繩、穂
長樑ゑほしにわけて、門松かけの小鼓や、「ありけう有ける新玉の、年も若やぐ旦より、
水は和ぐ柳は芽む。里も榮へまします」萬歳、鳥追とりぐくに、春は賑ふ折からの、厄
神參 厄除 參る氏は二ツ三ツ、まだ一ツ身の縫あけに、蘇民將來子孫繁昌 神堅か
れと石の華表の二柱、二人の親の家土や、小弓に添し八幡山、道すがらの參詣を、今若は
御覽じて、是ぞ源氏の氏神に、我門出の吉相」と、御手を合せ給ひければ、兄を見まねに乙
若も牛若も、母君の乳房の上に手を合せ、「さそうく」と愛らしき。堂「父義朝のまします

八幡山―矢にか
く
ささう―吉相の
説
深草山―深草少
將にかく
伏見―臥すにか
く

しどけなし―だ
らしなし

ば、如何に悦び給ひなん。類なき若共を、母が袂の下にのみ、埋木となすべきか」と、昔を慕ひ行末を、思へば盡ぬ憂涙、我身一つの雨ぞかし。古へ人の浮名たつ、戀の百夜の深草山、あまぎる雪に雲暗く、まだ朝明の心地して、三里に足ぬ玉鉾も、草鞋凍り足ごとへ、雪にもおなじ墨染の、櫻の寺の晩鐘に、宿はなけれど里の名は、伏見に行くれ三重給ひけり。降る雪の音聞く程に靜なる、竹よみをくの一つ庵。猫の通路跡付し、唯一筋の道細く、油火ほのかに揺立て、女の業かしどけなき、引さき紙を結びつぎ、半上たる伊豫簾、嵐ぞ雪をもて來る。常磐御前は灯火の、影を便りに尋寄り、「大和へ下る女なるが、幼き者を召具して、雪に道を失ふたり。一夜の情」と有ければ、十八九なる女房の、紙燭かかけて縁に出、親子の人をつくぐくと打まもり、「悼しの有様や。お宿申したうは候へども、此比平家の沙汰として、義朝の所縁をつよく詮議の候が、人々の有様咎めんは必定なり。自は白妙とて藤九郎盛長が妹、源氏譜代の者なれども、不思議の縁にて平家の侍、彌平兵衛宗濟の忍妻になり候。今にも夫の宗濟殿來り給はば、憂目をこそ見給はん。情なしとな思召そよ。妾がつらきは可憫さゆへ。何國へなりとも落給へ」と、いと念比の詞の色、紙燭吹消し入にけり。常磐も今は頼みきれ、力も落て先へも行れず、後へとて

うはがへ―着物
の組合の上
翠帳紅閨―翠の
帳、紅に飾りた
る美しき閨
ならはし―苦樂
伴ふならひ

は戻られず。とても此上は運に任せて兎も角も、今宵は爰に明さんと、少し風避軒蔭に、小袖の裊のうはがへを、敷寝の床と片敷せ、笠を並べて屏風とし、昔は翠帳紅閨に、隙間の風も寒かりし、身はならはしと身を捨て、兄弟に降る雪を打拂ひく、憐訪ふ小夜千鳥、泣て其夜を更さるよ。間なく隙なく心なく、雪は溢すが如くにて、寒風颯々と烈しくて、人の肌骨に染渡り、肌を刺す事鋭き刃の如くなり。悼しや母上は、勞れたる身を寒氣に破られ、惡寒五躰を苦むれば、「ア、堪がたや」と伏轉び、前後不覺に見へ給ふ。今若乙若驚き「喃如何にせん悲しや」と額を押へ手を按り今「いかに乙若母上の寒からんに、物着せません」乙「尤」と兄弟帯解き身狭なる。小袖を脱で母上の、裾や枕に取重ね打重ね、我は厭はで埋もるよ。雪の裸身哀れなり。母は苦き枕を上げ、「扱悼しの子供やな。斯ばかり母を大切に、いかに孝行なればとて、和御前達を凍へさせ、親も冥加に盡るぞとよ。子は息災に生立て、見するぞ深き孝行なり。風邪ばし引な衣着よ」と、着すれば脱で母に着せ、今「いや我々は寒からず。侍のならひには、如何なる雪にも戦して、能き敵と組ん時、寒し冷たしなんどとて、敵に背を見すべきか。寒いと云ふな乙若よ」乙「寒いと覺すな兄上」と、甲斐々々しけにいふ聲に、牛若目醒し這出て、見るを見真似に衣を脱ぎ、同く母に

着せまいらせ、手足も慄ひ凍ゆれど、其色見せず齒切し、拳を握り耐ゆる體、母は氣も
 絶へ日も眩み、「ア、情なや淺間しや。百萬餘騎の大將軍とも、仰るべき若共、一重の
 衣を着せかぬるは、如何なる神の咎ぞや。可憐の人達や。御身達が志綾錦より厚け
 れば、母は着ねども温なり。不便の者よこち寄れ」と、三人一所に搔寄せて、抱き伏して
 ぞ泣給ふ、道理とこそ聞へけれ。月も夜半に更行ば、彌平兵衛宗清、女の庵に忍びしが、
 雪に映ろふ人影は、何者が怪しやと傘かざし能見れば、常磐親子に紛ひなし。「綱代の
 魚ごさんなれ。餘さじ」と身づくろひ、猶も事を窺ふにぞ、慈母の哀憐孝子の振舞、流石
 源氏の根ざしなり。悼しさよ憐さよ。今人々を助けしとて、源氏の運の末ならば、終に
 は搜し出さるべし。假令搦捕たりとて、盡んず平家の御果報の、長久にもよもならじ。
 情知ぬは匹夫のよう。殊に我妻の爲には主君なり。彼是助けて落さんと思ひしが、いや待
 て暫し。主君清盛の御眼鏡を以て仰を蒙むり、助けては道立ず。搦め捕ては情なしと、
 とつつ舞つ思案して、左あらぬ體にて戸を叩けば、女房待かね柴の戸の雪打拂ひ、草鞋
 もとくく庵へ伴ひける。寢今宵は殊なふ冷さふらふ。先づ盃と温めて、暫く差つ差れ
 しが、女房申しけるは、「なふ宗清殿、自は源氏、御身様は平家、若只今にも義朝の所縁

裏門―心中を伺ふ

心氣を押し―氣を苛ち

左右云々―彼是口に申されぬ位

とならば、如何し給はん」と、他ながらこそ裏問けれ。宗清扱こそと思ひ、「チ、云ふまでもなし。主君清盛の仰なれば、如何に汝が主なるとて用捨はならず。眼に懸らば搦め捕て六波羅殿へ引立る。只何事も見ぬが佛、聞ぬが花」と答へしが、親子の人々物ごしの手に取る様に聞へしを、女房はつと思ふ顔。宗清氣をつけ、「やれ、小鳥共の軒に宿りて罵しきに、あれ追拂へ」と云ひければ、自なふ情なや。ふくら雀の羽を惱み、雪に折れ伏す篠竹の、篋に一夜の假の宿。左のみに太くなの給ひそ。はや夜も更ぬ床寒し。音せでお寢れ」と勸めける。床「いやく、某は殺生好。鳥の聲を聞ば捕ではおかす。是非追拂へ」と云ひけれど、も、女房更に合點せず、一夜なく泊る小鳥なれば、追ても打てもたよぬ」といふ。宗清心氣を沸し、「エ、不合點な。いで某が追退ん」と弓矢取て駈出る。女房は人々の影隠さんと引留る。振放し突退て、空矢四五本差詰め、射る音に、常磐驚き、兄弟を前後に搔抱き、はふく遁退き給ひける。宗清篤と見送りて、「あれ見よ女房、雀共が遁つるは。其儘置て某が殺生し、あの雀を殺させて、汝が忠節立つべきか。只何事も見ぬが佛、聞かぬが花、今合點いたか」と云ば、女房左右の事もなく、「あら頼母しや」と計にて、袂に縋り歎きしが、自扱過分なる御心、左右詞に及れず。連添ふ男に目がくれて、主殺と云れんも一門の名折

狩人—平家の追
捕殿しき事
古栖云々—牛若
等を奉じて義兵
を擧げよの意
會稽云々—合戦
して恥を擧ぐ
夕告—いふにか
く、鷄の事
鳥がなく—東の
枕詞

なり。又おの様に逆ひても本望にも候はず。如何と案じ顔をれしに、有難き御了簡、斯計
深き御恩賞、親にも子にも兄弟にも、七萬寶の寶にも、男一人は換ぬぞや。若君達も常磐
様も、此恩忘れ給はじ」といへば、宗「ア、く、暫く。常磐と云る名を聞ては、清盛公の御前
にて某が誓文立す。いつ迄も雀々。見ぬが佛聞ぬが花」と、領き合し弓取の妹脊のわけぞ
頼母しき。藤九郎盛長は人々に行逢しが、宗清が放つ矢は、妹が二心か不審と、庵に立
ち事の様を聞届け、横手を打て涙をはらくと流し、「爰明け給へ宗清殿。是は白妙が兄
源氏の郎等藤九郎盛長にて候。心底に依て妹を刺殺し、御邊と勝負を決せんため是迄
は來りしが、只今の志、生々世々に忘れがたし。一禮の爲對面せん」と云ば、宗清から
からと笑ひ、「又斑替の雀が來つて、由なき事を囀るよな。某平家の扶持を蒙りながら、源
氏方の禮を請、此宗清が立つべきか。エ、狼狽たか羽拔鳥、左手も右手も狩人の、おひ鳥
狩の網高し。鷹に捕るな御差にさよれな。古栖の雛を飼育て、初音揚よ」と云ければ、盛
長悦び合點し、「頼母し田面の雁、春は越路に立歸り、源氏一味の友千鳥、大將軍の羽翼
の下、揚たる旗は白鷺や。群居る鳥の翼を鳴し、會稽の巢立して、上見ぬ鷺の譽れを見せん」
宗「尤々急げや急げ。山鳥の尾の長尾の」盛「長居は恐れお暇」と、夕告の鳥が啼く、吾妻

大鷲一鳥
之背不知其幾
千里二降子

路指して飛鳥の、飛が如くに下りける、心は流石大鷲の、千里一翔源氏の運、未たのもしうぞ聞へける。

第三

鳥帽子折一鳥帽
子を作る職人

實や三百六十日曆々と卷盡し、既に承安三年と、移る月日は程もなし。平家の驕奢日に榮へ、清盛既に太政大臣を経て入道し淨海と法名ある。嫡子重盛内大臣、二男宗盛中納言右大將、其外末子末葉残らず稀有の官職、攝家華族に異ならず。爰に三條鳥丸鳥帽子屋五郎太夫とて、鳥帽子折の上手を召し、位々の鳥帽子冠言付れば、則ち出來致せしと西八條に持參する。一門喜び着し給ひ、御喜悅事終り、五郎太夫に祿給り、清盛入道仰けるは、「先年義朝が子供討て捨べかりしを、池の禪尼の中すに依て命を助け、今若を伊豆の國、蛭が小島に流せしが、密に元服し右兵衛佐頼朝と名のり、當家追討の院宣を乞望む山風聞す。又弟牛若も成人し、京近邊に忍び居て、院宣を望むと聞く。然ば頼朝も牛若も、法皇より密に位を賜はり、鳥帽子冠求めんは必定なり。隨分氣を付、見馴ぬ者鳥帽子買んと云ならば、早速に注進せよ」と宣へば、長田の庄司進み出、「これ五郎太夫、苟の事

鳥帽子一待にか
しよさい一所
在、間居無事な
る事(催言集)氣
もいたり氣
立もすぐれ居る
つくばね一つく
羽子に筑波根の
峯より落つるの
歌をかけたなり
蚊もくはぬ一羽
子つけば夏履せ
ず蚊も食はぬと
なり(世語問答)

しよさい一待

ならず、油断なく穿鑿し某迄知されよ。此者共を注進せば御褒美に與り、一代浮み上る事、長者になるぞ精出せ」五「エ、何が扱く、身の爲といひ、御奉公油断は致さず候」と、御請を申し罷立、宿所にこそは三重立歸れ。春の光を鳥帽子折、五郎太夫が一人娘にしよめとて十五歳、職人なれど鳥帽子屋は、お公家交はり上びたる、しよさいに連れ氣もいたり、都は戀の名所とて、自然なる伊達心、町には惜き姿なり。今日は吉日、高よし、棚飾らせて賣物に、細工の仕初祝儀すぎ、乳母下女を招き寄せ、春の遊びも今少し、今日は羽子突遊ばんと、腰元呼て遣羽子や、彼方此方へつくばねの、峯より落る瀧の白玉、一三三よう舞ふ小羽子、外へきるよな、反ゆくな。羽子さへも袖に留りて、情は厚き羽子板の、縁に似たる我中よ。夏瘦もせず蚊も喰ぬ、年の數々面白や。住む甲斐もなき夜は辛し。牛若君十餘年の霜雪を、鞍馬の山に踏分て、十六歳になり給ふ。秀衡を頼み奥州へ下らんと覺せしが、「童とあらば平家より搦め捕との沙汰きびし、元服して男になり下らばや」と思召、都三條鳥丸、太夫が店に立寄りて、牛鳥帽子買ふ。なふ鳥帽子買ん」と仰ける。女子共聞もあへず、「飾りたる鳥帽子の内、何れか所望候ぞ。能も悪きも空價なし。望次第に召れよ」と、しほも無く答ゆるにぞ、早しのよめは牛若に、曳れて廻る戀車、わりなき思ひ

ぞつたの人一
ごつくと無憂
想なる人

現なヤー打つと
かく
むづをれ一俄に
折るゝ

大鏽一烏帽子の
皺の粗きを云ふ
ひながた一烏帽
子の前額の皺
くしがた一烏帽
子の中央三角形
の下の半圓形

色に出、ま「なふぎごつたの人々つ、商賣といふ物は、賣にも買にも品ぞ有。御用あらば妾に」と、ちよこくとお傍に寄り、「烏帽子は何が御所望ぞや。御容色はよし、風はよし、見人我をや折烏帽子、戀に意氣地を立烏帽子、此お姿に譯知ぬ、我も心を懸烏帽子」と、脊中をとんと現なや。「しんき」と計り言差て、顔差入る襟深し。牛若君も色馴ぬ、鞍馬の山の深山水の、花珍しくむづをれに、くわつと赫らむ顔をあげ、「誠に優しき詞の縁、今日が情の初冠り。あはれ人目のすき額、風折烏帽子折もがな」と手を取給へば、しのよめも、魂も揉烏帽子、懸緒の紐の双結び、解ぬ思ひとなりにけり。斯る所へ五郎太夫立ち歸り、五「こは何事」と問ければ、娘は慌ててうろくと、「烏帽子召れよ父上」と、太夫が頭に被かせて、狼狽廻る笑しさよ。太夫牛若を一日見て、「して遣たり」と腹をも立す莞爾と笑ひ、五「ム、お若衆は烏帽子が御望みか。好はなきか」と問ければ、牛若聞き給ひ、「扱は御亭主候な。此童が着よふずる烏帽子は、大鏽の額を荒らかに一くせみくせませ、ひながたに間をあらせくしがたを嚴々と、雙眉付て左折が所望」と有る。太夫案に違ずと思ひながら、猶も試見んと思ひ、「あら似合ぬ好事や、當代左折を召れふずる人は、一年野間の内海にて失給ひし左馬頭義朝か、其御子惠源太義平、二男朝長三男頼朝、扱は鞍馬におは

雙眉一帽の前の
中尖りたる鬘の
下に少し出でた
る所(以上貞丈
雜記)

取はやナイ取持
つ

牛のした一ツ
ゾコと云ふ鬘
魚

小結一烏帽子の
後方突りたる所
に結ぶ紐

します牛若殿とやらんこそ、左折は召れふすれ。平人は及びなし。但し少人は由緒ばし
候か「牛若笑しく思召し、「身には系圖の無れども、若も咎むる人あらば、都の宿に古き烏
帽子の有つるを、所望して着したり。左折も右折も、此冠者は知ぬよりと、ぬぎ捨て通
るならば御身の難も有るまじ。童が科も脱るべし。平に所望」と仰せける。五郎太夫は「仕
濟たり、牛若に紛ひなし」と心の内に悦び、五「其義ならば出来合は候はず。今宵の内に折立
てさせん。一夜は是に」と云けれども、牛「いや只明日參らん」と立出給ふを、しのよめ袂を
引留て、「父もお宿と申さるよこそ幸なれ。烏帽子も折て御祝儀も、取はやして參らせん。
是非に」とあれば、牛若も情の糸に繋れて、岩木に有らぬ風情なり。太夫彌々笑を含み、「で
かいた、しのよめ、年の始の商旦那、随分御馳走申せや」と、口には云て心には、「たつた
今搦捕、牛若殺して牛のした、大判小判の擲取」と、山も見えぬ胸算用、六波羅指てぞ急ぎ
ける。いつの間にかは誰掛橋の思ひ川、早宵の間に深くなり、漏さぬ水は合惚の、淵も磯
とぞ契らるよ。其夜も深て、しのよめは、左折に小結をゆひ、五「御烏帽子出来たり。自は殿
始、おの様は烏帽子始、目出度く闈にて御祝儀あれ」と、瓶子に盃取副て、御前にこそ
直しけれ。牛若御覽じ、「扱々嬉しき情の程、今は何をか包み申さん。某は左馬頭義朝が

八男牛若丸。平家を亡し源氏の代となし、此恩は報ずべし。去とても世にあらば、日本國の諸大名、悦びの色をなすべきに、口惜の次第や」と、御落涙ましませば、五「扱は左様に候か。御悼しうこそ」と許りにて、共に袖をば絞りける。牛若重ねて「我先祖義家は、八幡にて元服有り。八幡太郎と名のり給ふ。我も是を形取て、烏帽子親は正八幡、鞍馬の大悲多門天、太刀と刀を八幡多門」と觀念し、床の柱に立置て、我と烏帽子を取て戴き、太刀の前にも三々九度、刀の前にも三々九度、直に土器頂戴し、牛「扱名は何と付べきぞ、テ、九郎冠者源の義經と付申さん。源氏の御代は千秋樂萬歲樂」と繰返し、獨言して言るよ御有様こそあはれなわ

烏帽子折名づくし

しのよめ倩々見參らせ、御元服を祝はんと、奥の一間につよと入り、兼て用意や仕たりけん。數多の烏帽子掛に様々の烏帽子を着せ、色々の装束を打掛々々、人の如くに拵へて御前に竝べさせ、五「なふお目出度や。關八州の諸大名御味方申さんとして、手勢々々を引具して、御祝に參りたり。末繁昌の其兆、御酒一ツ」とぞ祝ひける。牛若殆ど御悦喜あ

梨打烏帽子—ナ
ヤシ打にて柔き
もの(貞丈雜記)

龍車—陸車なる
べし
天地を動し—古
今集の序文によ
り文武の文に體
けたり

牛「實に珍しや面白や。頼もしや東路は源氏好の梓弓、取傳はりし武士の假名は如何

に」との給へば、姫は烏帽子を打被き、「是は伊豆國北條の四郎時政。一門榮へ類廣し。數な

らねども某が御味方と申さんに、凡そ近國に残る武士は候まじ。手勢は限り知れず」と、謹

んでこそ申しけれ。牛「次に座せしは梨打烏帽子、直垂着流し太刀佩て、さも大様に見へし

は如何に」云「さん候。某は畠山のなにかし秩父の庄司重忠。若武者の昔より力業を好んで、

大船を跳返し龍車を留むる勢有り。四相を悟る自然智は、我さへ卒や白露を、玉と欺

く謀、座乍ら萬里の敵を察し、戦はずして勝利を得、天地を動し、鬼神を感ぜしむる

なる、文武を雙の翼の臣、手勢合せて六萬餘騎御先手」とぞ答へける。牛「續いて并居し人々

は、懸烏帽子に大紋の袖たぶくと搔合せ、左も勇々しげに揃ひしこそ、土肥か小山か梶

原か。其名懐し」との給へば、云「抑是は宇多天皇の後胤佐々木の太郎、同姓次郎三郎盛綱、

四郎高綱、五郎吉清候なり。牛「次に伺候す風打烏帽子、後高に着なしたる。本國假名はいか

にく」云「是こそ三浦の旗頭、和田の左衛門義盛、年積つて六十六、軍に逢ふ事十五か度、

一度も不覺の名をとらず。老木の枝は撓めども、心の櫻華美に、榮へん君の御出世を、

千代萬年と壽きて、九十三騎の一類ども、召具し參上仕る」牛「末座に扣へし懸烏帽子、素

襖袴あうかまに大太刀おほたぢ佩はき、殊ことに勝すぐれて見へたるは、是も三浦みづらの一黨いっとうならめ」一實じつに能御覽よくらんじ候ひし。我義盛わがぎさきが三男朝比奈あさひなの三郎義秀よしひで、色黒いろくろく手足てあしあれ、疊たぐはり觸あの荒男あらしこ、茶ちやの湯連歌ゆれんがは不得手えてなれども、朝比奈あさひなが癖くせとして敵てきと見て勇いさむ事、荒鷹あらいだかが雉子きじを見て烏屋くわを潜ひそるに異ことらず、假令たゞし平家黑鐵くらがねの城かまを構かまへ石門いしもんに籠こもるとも、片手かたてに挿さつ押破おしやぶり、清盛父子よしみふしを初はじめとし、撫斬なでざり胴斬どうざり拂はらひ斬ざり、將棊しやうぎ倒たふしに攻せめ亡ほろび、源氏みなもとのの御代みよと爲なし申まをさん」と、辯舌べんぜつによどみなくそれぐに答こたへしは、潔いさぎよくこそ聞きへけれ。爰こゝに長田ながたは五郎太夫ごろうたふが注進ちゆうしんにて、長ちやう其小冠者こくわんじや何事なにごとかあらん。拔ぬけがけして討取うちとれんと、いきりきつて來りしが、障子しやうじの際すまより遙はるかに見れば、烏帽くわぼ子直しひた垂たり流ながして大の男おほのをとこ數十人、和田わだよ佐々木ささきよ朝比奈あさひなよと云いふ聲こゑに、長田ながたの庄司しやうじはつと戦慄せんりつ氣きを失うしな、空恐そらおそしく胴慄どうおそ、足あしも腰こしもわなくと、前後ぜんごを忘わすれる計はかりなり、太夫たふきつと見み、「怯おそれ給たまふか庄司殿しやうじのん。踏込ふみこんで一討うちに遊あそばせ」といへば、長ちやう那なを見みよ鎌倉勢かまくらせいが雲霞うんかの如ごとし。此方こゝが細工さいくにならぬ」と云いふ。太夫たふ驚おどろろき覗のぞきて見れば、案あんの如ごとく兵數人へいすうにん列座れつざせり。五い「あつ」と言いふより慄ふる出し、二人ふたりはひよろくうろくと、慄ふるひて何なにの埒らちもなし。何處いづこにてか金王丸こんわうまる、此由こゝを聞出きし、飛とぶが如ごとくに駈付かけつけ、「案内あんないまう」と呼よはつて、二王立にわうたちにぞ立たたりける。長田味方ながたみかたと心得こころえ、駈出かけいでて見れば金王こんわうなり。「ハア南無阿彌陀佛なんぶあみだぶつ」と地ちに俯伏ひれふし、穴あなへも入いりたき風情ふぜいな

五枚兜―鍔の五枚あるもの

三番さ―三番髪

り。太夫奥にうろ付しを、飛掛て確と捕れば、長田表へ逃んとす。同く取て伏する間に、牛若姫諸共に奥より立出給ひける。太夫聲をあけ、「我等は何も科は無し。烏帽子が御用に候はば、おまけ申さん。召ませひ」と、慄ひく言けるを、牛ヲ、サ某が烏帽子は、黒鍔の五枚兜蹴形うつて龍頭、鍔の付たる烏帽子が所望ぞ。己助くる者ならねど、娘が心を察し命計りは助ると、腰骨どうと踏をれば、泣々るざり助りぬ。金是長田、某は今法躰し土佐坊昌俊と名乗ども、金王丸と言し時、己奴を漏せし無念さに、其時の姿を残り、四十になる迄此前髪。今こそ落せ是見よ」と、附髪假髪を取しより、土佐坊とこそなりにけり。金「今殺すは可惜物。關東へ連下り、頼朝の御前にて弄殺にすべし」とて、高手小手に搦付、「扱源氏御出世。今日の御祈禱に千秋萬歳所繁昌、一指舞ふ目出度や」と、三番さの烏帽子を着し、袖を簪して、「ハ、アをさへてく、思ふ敵を取て押さへて、源氏の御代より外へは遣じとぞ思ふ」と、若君を祝ひ參らせ、「疾々東へ御下りおはしませ。扱某は都の様躰聞つくろひ、跡より追付奉らん」と、勇に勇む有様は、只樊噲も斯やらんと、恐れぬ者こそなかりけれ。

第四

生中に一怒ひに

しげ縫一緊く縫
ひたる大口袴

園生に云々一人
に勝れたる者は
必ず願はる、謎
に紅は園に植え
ても隠れたしと
あり(毛吹草)

彌平兵衛宗清は、妻の白妙源氏の由縁有ゆへに、頼朝兄弟の命を助け参らせしが、其身平家の譜代なれば、生中に事むづかし、源平わかち立迄は暫く身を退き、世上を見んと、去年の秋より病氣といひて奉公ひき、養生の氣晴しとて夫婦諸共京近く、野山廻れば自然、心浮る瓢箪に、酒など入て腰に付、觀音巡り寺社の縁、花の下影行暮る、其所を其日の極樂と、物に構ぬ身の樂は、命も延る姿なり、斯る折から十五六なる君達、しげ縫の大口に左折の小結着て、直垂の袖にて顔隠し、忍ぶ振にて通りける。夫婦急度目くばせし、直と寄て袖をひかへ、是申し、御姿紛ふ所は候はず、源氏の大将牛若殿と見掛たり。某は平家の兵彌平兵衛宗清、申すべき子細あり、名乗せ給へ」と、小聲になつて言ければ、少人聞も敢が、「チ、某こそ牛若よ。定めて我を探すらん。今は脱るゝ所なし。はや首討て清盛に見せ、高名にせよ」と、清しけにして居られけり。宗清手を拍「園生に植ても紅の流石なる御舉動。全く君を討ち奉る心ならず。是なる者は我女房白妙と申して、御家來藤九郎盛長が妹。其由縁に依て先年御幼少の時分、伏見の里にても御兄弟を見脱し助け奉りし。今とても某世間の唱も候へば、御味方こそ叶すとも、などや討取申すべき。心易く落し申さん」と言ば、少人聞き給ひ、「然らば明て申すべし。我牛若にて更に無し。烏

帽子折の五郎太夫が娘、しのよめと申す女なるが、親にて候五郎太夫、慾に目くれ訴人せしを、澁谷の金王入道土佐坊の働きにて、若君も恙なく、長田も生捕給ひしを、父の太夫が弟、妾が爲には伯父坊主、吉峯の雷立法師重ねて平家へ訴へ、監物太郎頼方が手勢を以て、雷立法師が加はり、東路へ追手をかくる由、妾は君が一夜の情、我牛若と名乗追手に出合討れなば、其隙に若君様、一足なりとも落給はん。親伯父の悪心も妾が露の志」と、語りもあへず泣居たり。宗清夫婦感じ入、「其義ならば女房、そちは此姫と同道にて、随分追付御供せよ。某は爰に残つて追手の大將監物太郎に出合、長話を仕かけ邪魔をいれん。其間にはやく落せ」と言ければ、白妙悦び「然らば妾も身を扮さん」と、夫の羽織に編笠被き、しのよめを先に立、跡を慕ふて追駈る。案の如く追手の大將監物太郎、手勢引具し走來る。宗清急度見、「これくくくく、監物太郎頼方にはてなきか。邊しき體何處へ往ぞ」と言懸る。頼方顧り、「ヤア宗清か。我は今日源の牛若が追手の役を蒙り、是なる訴人は、烏帽子屋の五郎太夫が弟雷立法師。則ち彼が案内にて、只今急に追駈る。其方は病氣とて樂をする浦山し」と、言捨て駈出るを、「先待て」と押留め、「夫は近比大儀千萬。去ながら侍は息災にて奉公するこそ手柄なれ。随分ほつかけ牛若を討留て、御加増に預

くどうも一九度
とくだくしと
掛く

泣く子も云々
辨へなき者も場
合を見て氣を利
かせよと云ふ懸

腰ををる一中を
切る

り給へ。幸酒を持ちあはせられたれば、門出祝はん。先一ツ」と腰の瓢箪取出せば、麴「是は誠に氣がついたり。然らばお辭儀申さぬ」と引受々々、「我も三盃、雷立も三盃、御亭主も三盃、合せて三々くどうは御禮申さぬ」と又駈出るを、寤「はて扱監物呑込するは手が悪し。此比久敷參會せず、暫時は積る物語、今少」とぞ引留る。監物重ねて、「時も時折も折、大事の落手に行く者に、咄せんとは譯も無い。爰を放せ」と引放す。寤「はてさう堅う言な。新しき咄あり。ちよつと咄さん。聞け」と言。監物少腹を立て、「泣く子も目あげ、咄所か其方が様な隙ではなし。重ねて聞ん」と逃てゆく。寤「いや咄掛つて話さでは置ぬぞ」と、捻合引合留むれば、監物殆ど持飽み、「さあちやくくと咄さば咄せ」と、不請顔にて聞居たる、心意氣こそ笑しけれ。宗清どうと座をくみ、「是は大事の物語。夫なる御坊も軍兵達も聞給へ。武士たる君は後學」と子細らしく聲作ひ、「昔々或所に爺と姥と有けるに、爺は山へ柴刈に、姥は川へ洗濯」と聞きも果す、麴「エ、爰な者はあまり人を阿呆にする。酒に酔たか宗清。相手になるな軍兵共、急け」と振切て跡をも見ずして走行く。宗清聲をあげ、「大事の咄の腰ををる。先さきを聞け監物。猿の頬は眞赤な」と、笑ひてこそは別れけれ。御曹子牛若は、江州土山まで落延給ふ所へ、白妙のよめ追付て、「雷立法師が訴人にて、監物太郎追断申すを、

宗清道にて長物語を仕出さん、其間に一足もはやくと言ければ、牛若實もと悦び、宿
を開放れ給ひしに、比しも春の雪氷、解て流れて田村川、水嵩増つて波早く、越すべき
様のあらざれば、牛「よし此上は如何せん。運は天に有明の月のよすがら爰に」とて、田村
の宮の拜殿に暫く休らひおはしける。監物太郎頼方は宗清が長話、由なき隙をいれける
と、足をも付す打ければ、早土山に着けるが、頼「田村川の水高し。此邊にこそ在つらめ。
関をつくつて劫かし、搜して討や者共」と、十方に入亂れ、関の聲をぞ揚にける。やは脱れ
ぬ所ぞと、牛「源の牛若丸爰にあり」と駈出給へば、白妙しのよめ諸共に、弓手馬手に引添
て、面もふらず走向ふ。頼「彼奴は兵衛天狗の弟子。殊に荷擔人有りけるぞ。侮つて負傷す
るな」と、八十餘人の追手の勢群つて掛りしを、三人飛鳥の身も軽く、飛追跳越踊越、花
を亂して三重戦ひける。女わらはと言ながら、一人當千の剛の者。入かへく追立れば、

しらんで一負色
になつて

一子出家云々
孟蘭盆經にある

平家の兵切立られ、戦しらんで見へにけり。雷玄法師堪り兼、「牛若は兎も角も、親伯
父に逆ひたる女めこそ頼憎けれ。擲殺してくれん」と、大手を擴けて駈廻る。しのよめ
長刀追取のべ、「是伯父坊様、衣の手前も有ぞかし。一門の悪心を、教化こそせられずとも、
人の訴人は何事ぞ。一子出家すれば九族天に生ると言ふ。御身は引かへ六親を地獄に落

すこび一すは註
詔一寺趾の骸
(倭訓栞)

笠木一鳥居の屋
根

す大悪僧。テ、結構な御出家。サア口惜くば寄て見よ」と、長刀をひらめかせば、雷立甚だ怒を爲し、「悪心却て大善根。事も知で出家を悖く己こそ罪人よ。塞の河原の石子詰」と神前のくり石を、追取々々飛礫打、雨や霰と投かくる。しのよめ長刀むねに爲し、飛來る石をはらくく、はらりく切拂ひ、八方に打拂へば、身には當らず飛返り、敵の眞向額口鼻筋首筋頭の鉢、さんぐくに打割れ、「わつ」と言てぞ逃散ける。白妙少換んと逃行く敵を追懸しに、頼方が郎等占部の新七取て返し、渡合て切合しが、太刀を捨てむすと組む。白妙莞爾と打笑ひ、「女と思ひ侮るな。盛長が妹宗清が妻なるぞ。主有る女に抱付は、すこびたる徒者。生ては我が道立ず」と、言より早く搔潜り、袂取して跳返し、隙なく首を討たるは、瞬きならぬ早業なり。討残されたる兵共、喚いて懸れば牛若丸、「ものくし葉武者共、一人も餘さじ」と、獅子奮迅虎亂入飛鳥の翔の手を摧き、隠れ現れ陽焰稻妻、水の月手にもたまらず防るよ。雷立頼方左右より、隙間なく攻ければ、華表の笠木に飛上り、からくと打笑ひ、牛なふ追手の人々、其方は大勢、味方は僅三り。暫休み申すぞ」と、左り煽で在しける。頼方急つて悶搔ども爲べき様のあらざれば、遠矢に射取と打つがひ、よつ引てはたと射れば、傍なる松にひらりと移る。二の矢を放せば、「心

ひつしき一不詳

續經一よしに掛

得たり」と、元の鳥居に飛戻り、梢の猿の枝移り、振舞蜘蛛の如くなり。雷立今は堪り兼、「愚僧が思案候へば、鳥居も松も搦倒さん」と、土民の家なる鋏追取り、柱の根際に打立つ。牛若かさ木に兩足かけ、宙に下つて雷立が、眞向をしたよかに切給へば、「南無三寶」と逃て行く。續いて飛をり取て引据、牛「御坊にくどい教なれども、釋迦に經と言ふ事有り。生て恥を洒さんより、牛若が引導にて、成佛せよ」と拜打、頭よりひつしき迄、左手右手へぞ捌ける。大將頼方怒を爲し、「女わらはに是程迄、切立られし口惜さよ。一騎も残らず討死せよ。かよれやかよれ」と恥しめられ、むらくと寄懸る。牛「夫こそ望む所よ」と、又三人が引返し、捲り立く息をも次せず追立てば、四十餘人薙伏て、生残る者迄も、半死半生叶じと、田村川に飛入々々、浮ぬ沈みぬ漂ひける。牛若御覽じて、「およ面白しく。人筏ござんなれ」と、三人手に手を取くみて、流るゝ武者の頭を踏み、肩を踏へて、飛越々々向ふの岸に駈上り、「チ、骨折々々御辛勞。關東勢を引牽し、重ねて一禮申すべし。門出よし吉凶よし。天氣もよし道もよし。萬世の中義經が、天下を治ん瑞相」と、悦び東に下らるよ。

第五

豊旗雲一雲の旗
に似たるを云ふ
伊豆―出づに掛
く

こぼるゝ―餘れ
ばこぼるゝの懸

北枕云々―北枕
すれは毒の入り
と云ふ懸

君が代は千代に八千代に榮へます、豊旗雲や伊豆の國、蛭が小島におはします、右兵衛の佐頼朝は、盛長一人配所の伽、密に平家追討の御企頻にて、關東の諸大名内々志を通じ參らすれば、馳て武運も開くべき蒼める花の匂ひ有り。然る所に、「上方より澁谷の金王參上」と申しける。頼朝悦び、「珍しや金王丸、汝は法躰しけるよな。法名は何とか言ふ」との給へば、金さん候。昌俊と申す名乗字を其儘に、土佐坊昌俊とついで候。蛭して上方に別條なきか。九郎は如何に」と仰ければ、土佐坊承り、「されば候。上方は平家の驕奢十分にて、こぼるゝ六の源の、君御出世を松の葉と、萬民祈り奉る。御舍弟九郎殿も御供致せし所に、幸なれば伊勢太神宮へ、御參詣有るべき山。拙者は君への御土産に、生着を持參致せし故、損せぬ内に一刻も早く御覽に入べき爲、先づ御先へ下つて候」と申せば、我君も盛長も、「土産の肴は何ならん。疾々」とぞせめ給ふ。昌、近比輕微の至りながら、野間の内海大網にて取漏したる大悪魚、御賞翫遊ばせ」と、長田の庄司を引出せば、頼朝大に御悦喜あり、蛭、父義朝の命を取りし北まぐらの毒の鰻、今我爲には目出鯛々々、釣た所は心地よし」と、咄と哄き給ひける。蛭、時刻移さず料理せよ」と御長刀を賜ければ、「承る」と土佐坊長刀取のべ小踊して、首ふつつと搔落し、宙に上てちやうど受け、切先に貫き見參に入奉り、

「骸は島の水底にふし付にせよや」とて、下部に下し行はれ、御悦びは限りなし。此事北條へ聞へければ、時政の北の方より、女房達を使にて、色々の絹八重がさね御祝義に進上有り。頼朝御覽じ、「時政子婦の志返すくも嬉しさよ」と、若松摺たる小袖を、肩に打かけおはしまし、鏡臺取寄せ我御顔、つくくくと打視り、「抑某清和天皇の臺を出、六孫王經基より、満仲頼光に相續いて、代々天下の權をとる。我其血脉を續べき人相、尋常に變り、こんこつの生れ有り。雙の眉は八幡の八の字、兩眼の瞳には月日の光、額の黒痣は屬星木曜星、頭の辻には天照太神五躰を守護しおはしまし、一度天下の將軍と仰るべき相現れたり。如何にく」との給へば、土佐坊を初め、使の女房若黨等、「實も仰に違はじ」と、一度に頭を傾ける。盛長は返答なく、事笑しけに顔しかめ、空嘯いたる其風情、鏡に映れば頼朝氣色を損じ、「後きたなし盛長。只今の頼つきは、全く頼朝を侮つての振舞、近比奇怪千萬なり。左程頼みなき頼朝に仕へんより、頼みある人に奉公せよ。罷り立て」との給へば、盛長涙をはらくと落し、「こは口惜き御詔や候。末頼み有るま君とて御奉公仕るを、忠節と思召さるよか。頼みなき主君を守立て、忠を勵こそ臣下の道とは申べけれ。然らば君の御心には、頼みなき下人とて見放し給はん恨しさよ。其御心ゆへにこそ

源家の嫡流として平家に世をせばめられ、恒慣き配所の御住居。中々末の御出世も、覺束なふ覺へ候ぞや。口惜の御所存や」と、涙に咽び申しければ、君を初め人々も、「實忠臣の金言。心有ける諫や」と、皆感涙をぞ催しける。頼朝あく迄感じ給ひ、「此上は萬事を止め、平家を亡す軍慮こそ肝要なれ。聞ば牛若は伊勢參宮したるよし。北條が侍共を驅催し、汝は迎ひに登るべし。疾々」との給へば、盛長仰を蒙りて、御坂迎と三重聞へける。

牛若宮めぐり

是は扱をき御曹子牛若は、しのよめを誘ひ、さも美麗にて參宮有る、御威勢こそは勇々しけれ。よの木綿垂ちらす神風や、伊勢の宮立物ふりて、外宮の森はしん／＼と、神寂渡るたゝずまひ、昔覺へて安かなるこそ殊勝なれ。扱遷宮の御祭禮、數の奉幣事終り、是こそ伊弉諾伊弉册の尊御國讓を仕給ひし天照大神、事も愚や御本社は、餘の御社に事變り、丸木柱に茅の屋根。供物は三杵きねが神樂を參らす。實古への木の丸殿を准へて、土塔三尺茅茨剪らずと聞へしを、宮遷し給ふこと、民を憐み玉銚の、道の道たる御惠、世界國土を守らせ玉ふ。末社は八十末社なり、扱又外宮の御社は、此神の第一王子

きね一巫女
土塔云々一至極
實素なるを云ふ
霜室高三尺土塔
三等茅茨不切
承接不判(鬘子)

扱、ゾまひ一有

相殿一ツ社殿
に二柱以上の神
を祀る
月讀一諸册の御
子 妻は月と日
とを云ふ
輝一晝にかく
難陀陀陀一釋尊
降臨に象る

及び一素唱盃尊
の語尾「を」にい
ひかく

上賀茂一神にか
く

吉備一邊にか
かく

あひに相殿の太神宮。末社は四十末社なり。雨の宮風の宮、風雨隨時の御空の雲井、月よみ日よみ國は豊に、民榮へさせ給ひけるは、誠に日出度候ひき。天の岩戸の暗き世も、爰は姪子の御社、御誕生の折柄に、難陀が口より熱湯を出し、跋陀が口より温湯を出し、産湯をひかせ奉り、綾が千反錦が千反、金襴緞子の産着を召せ給ひしかども、三年足起給はねば、天の岩樟葦分の、手ぐりぐりくくく舟に乗せ奉り、青海原へ流し給ひて、海を護に請取給ひ、西の宮の惠美須御せん、命長棹最も賢き釣針下し、あら目出鯛を釣つり釣た、姿のやれ扱しほらしや。此方は素蓋の及びなき八雲立との御歌は、大きに和ぐ日の本の、和歌の初の御神にて、是ぞ祇園牛頭天皇。扱又此方は藤原や、天兒屋の春日の宮。弓手は八幡岩清水。斯程清しき御社を、誰か熱田と名付けん。爰は住吉生玉や、稻荷は五穀の上賀茂や、又下賀茂に貴舟松の尾平野の神、北野に續く梅の宮、昔に變らぬ今宮も、太神宮と伏拜む。五靈八社山王は、廿一社ふきおろしに、白髭の神なみは、さらくくくくゑいさらゑい、さらく颯と漣や、漣や、滋賀唐崎の御神は、是も八岐の蛇ぞと、伊吹嵐にたがの神、鹿島香取諏訪三島戸隠神田の大明神。惣じて日本國中に一萬七千餘社の神。又吉備の大神は、上には一まん下には粟、三石の数々の祖神はこ

源氏烏帽子折

な々神樂―伊勢
大神宮にて行ふ
神樂

誠を以て云々―
神は正直の頭に
宿るの感

小忌衣―狩衣に
似て袴の上に若
きもの

れ此御社。擁くくくく護より、めいくれきくさつくくくと、五十鈴川に
立浪の、音も靜に君が代を、千代萬歳と守らせ給へと、八拜九拜三重爲し給ふ。然る所へ
盛長は、關東勢を引具して、「御迎がてら參宮の望にて、夜を日に續で参りし」と、ざよめ
いて來りける。牛若御喜悅ましくて、兩宮の御師を召し太々神樂を三重捧けらる。神も
納受ましくけん、社壇の屋根に三光現はれ、音樂曠恚の濁を清め、辰巳の方の神杉よ
り、源氏の白旗雲となり、光を添てたなびさける。人々あつと禮拜あれば、旗雲の中よ
りも、伊勢岩清水住吉の三社の御神ありくと現じ給ひ、「神は神なり。神人を離れず。誠
を以てやどりとす。神は人の尊敬に依て威をまし、人は神の恵に依て運を添ふ。源氏の
末は萬々歳。五穀豐饒民安全、國土豊に守るべし」と、彌陀釋迦觀音三昧の、御本地を現
し給へば、牛若歡喜の思ひをなし、百拜千拜幣帛を翻へす小忌衣、東の勢を催して怨敵
を追伐し、源氏繁昌國繁昌、治る御代こそ久しけれ。